

共同研究プロジェクト

大学教育の視点から本学の教育を考える

活動報告

中村 博幸・依田 博

本プロジェクトは、本年度が一年目にあたる。研究の目的は、大学教育についての様々な視点を整理しながら、本学での実践に向けての方向を探り、提案する事でもある。以下に本年度の活動経過と内容を報告する。

プロジェクトを立ち上げる為に、昨年度に数回勉強会を行った。そのメンバーの一人が他大学に転出した為に、活動は年度後半に集中した。

1. プレ勉強会（昨年度）

(1)第1回「研究のテーマと概略」10月11日

大学教育の実践を考えるキーワードをあげ、意見交換を行った。その結果、各々が話題提供を行い、それを元に議論をしてテーマを絞る事になった。

(2)第2回「ピアサポート…北海道大学事例を中心に」「様々な学びの場面」11月29日

(3)第3回「大学生の発達課題として『ほどほど』をキーワードに」12月26日

(4)第4回「教育の累計と外部要因の影響」1月17日

(5)第5回「中間層の『ダイガク』の現代的意味について考える」2月28日

2. 本年度の活動

(1)シンポジウム共催 2014年2月11日

人間学研究所公開シンポジウム「日本の大学、このごろ焦ってませんか？」を共催した。

本シンポジウムは若手研究者による、大学教育を考える内容であった。学問の府としての大学の意義と、多くの学生にとって実学を学ぶ場である大学の意義の両立は可能であるかという問題が提示された。

(2)外部研修会参加 2014年3月12日～14日

九州国際大学及び日本文理大学の研究グループが主催する研修会に、プロジェクトのメンバーを中心に5名が参加した。(依田、中村、手嶋、澤、矢島(FRO))

先進的な活動に直接参加する事により、メンバー個々の視点が形成される事をねらいとする。

①社会人基礎力を外部テストで評価する妥当性 12日～13日

本学でも採用しているPROGテスト(株リアセック)をたたき台に、外部テストの活用について研究会が行われた。

まず利用の実状について報告後質疑が行われた。(九州国際大学、長崎外国語大学、熊本県立大学、京都府立大学、日本文理大学)

その後、外部テストの発展的活用の可能性について、議論が行われた。コンピテンシーは測定できるのか、社会人基礎力は短期間で伸びるかまた測定できるのか、大学教育と社会人基礎力の教育は両立できるのかなどが議論され、本学から参加したメンバーも議論に加わった。

②学生参加のオフキャンパス研修 13日～14日

複数の大学の学生が参加するアクティブラーニング型基礎演習の研修である。(本年は、九州国際大学、九州女子短期大学、北九州市立大学、日本文理大学から計36名)

設定はI回生基礎演習の課題解決型授業において、BS・KJ・ジグソーなどの技法を使いながらプレゼンテーションまでをシミュレーションするものである。

○特色

・異なる大学の教員・学生が、合同で学ぶ習

- ・授業開講前の担当教員のシミュレーション
(授業計画が悪ければ改善)
- ・新任教員のFD
- ・4月から上級生となる学生のピア・リーダー育成

教員はコーディネータ、ユニット担当、グループファシリテータ、学生としてのグループ体験に分かれてブラッシュアップする。本学からの参加者も、教員でつくられた二つの学生(?)グループに加わって研修をした。

このオフキャンパス研修は5年程前から始められ、かなり高度なプログラムがつくられている。

3. 研究代表者から

(1)「本学の学生の教育について」依田 博

マージナル大学(卒業生の25%以上が進路不確定の大学)である本学の大学としての使命は、「なりふり構わず」学生を教育することにある。このことを学んだ1年であった。学習の機会、初年次教育学会、高崎経済大学でのPBLに関するヒアリング、そして本学人間学研究所と共催によるシンポジウム「日本の大学、このごろ焦ってませんか?〜『社会に役立つ大学』の価値を問う〜」、「平成24年度産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業調査九州・沖縄・山口地区」グループが主催した「PROGテスト、初年次教育、ジェネリックスキル等をグループワークやロールプレイングを通して学ぶ」研修会などである。以下は、その学習の成果をまとめたものである。

まず「なりふり構わない」のは、もちろん「教員の姿勢」である。幼稚園から大学までの教育課程で、大学教員のみが「教授法」のトレーニングを受けることなくその職に就くことができる。しかし、大学ユニバーサル時代においては、特にマージナル大学で教授法の改善に無関心であることは容認されない。

教授法改善の方向は、マナーと知的成果の二つに分けることができよう。マナー問題は、いうまでもなく学生による私語、遅刻や無断欠席、そして惰眠である。だが、マナー問題と知的成果問題はコインの両面である。一定の知的成果

をあげない限り、「単位を修得することができない」仕組みであれば、マナー問題は一挙に解決する。ポイントは、学習者としての責任を学生に自覚させる教育方法の導入である。その一例が「ループリック」による授業評価である。また、抽象的な講義内容と具体的な社会問題を連動させる講義の工夫も有効である。そして、何よりも一定の知的水準に達しない学生には単位を認定しないという教員の姿勢である。

以上のような教授法改善に基づく講義や演習には、教員側に膨大な授業準備時間を必要とさせる。特に、学生の学習責任を学生自身に自覚させ、その自覚に基づいて学生が積極的に学習に参加するように誘導する有効な方法にアクティブラーニングやPBLそしてループリックによる学習評価である。ただし、それらの方法は、教員に綿密な授業設計と準備を必要とさせる。当然のように1コマあたりの授業準備時間は飛躍的に増大し、他方、教員の負担コマ数が増えると1コマあたりの授業準備時間は級数的に減少する。さしあたりの有効な解決策の一つは、「演習」をカリキュラムの主要な柱とし、他の科目を極力減らして教員の授業負担を減らし、演習の運営に多くの時間を割くことができる研究環境を用意する。さらに、演習を中心に、というよりも演習の知的成果と講義や実習科目が連動するように工夫し、諸科目を合理的に配置するというカリキュラム編成である。

(2)「大学教育を考える視点」中村 博幸

大学教育(初年次教育、接続・転換教育を含む)について、これまでに様々なレベルおよび角度からの言及がある。マクロでは「学士課程教育(中教審)」、「ディプロマポリシー、カリキュラムポリシー、アドミッションポリシーに基づいた教育」、ミディアムでは「教育の質保証」、「大学の理念に基づいた教育」、ミクロでは「カリキュラム・マップ」、「ループリック」、又具体的には「入門期教育(初年次教育)」、「共通教育と専門教育の接続」、「キャリア教育(広義)」と大学の教育課程」など、多くの視点が述べられている。

ただし、これらの視点の具体的な実施および

効果について議論するには、個々大学の状況の分析が欠かせない。そして、その分析の際には、様々な要因を考察に入れる必要がある。たとえば、学生の学習意欲、学びに対する意欲、教職員の教学に対する考え方や姿勢、その地域における大学の位置づけや評価などである。

学生の学力や学習意欲が多様になっているとはいえ、学習スタイルなども含めてそのベースは高校教育までで形成される。したがっ

て個々の学生が体験した高校教育を確認する事が重要である。そして高校も多様であるといえ、よく似た状況の高校から本学に入学する学生が多いのであれば、その様な高校の学校モデルを確認する所から始めるべきである。大学の教育目標や個々の教員の教育観に基づく指導と

学生の実態とのミスマッチがある限り教育効果はあがらない。その意味で本年度の活動(1)(2)を分析する事が必要であろう。

4. 来年度に向けて

来年度は研究計画を具体化する為に、たとえば次の活動を考えている。

(1)「外部研修会参加」報告会

各参加者が、各々の視点からの報告を行い、それを元に意見交換を行う。

(2)よい授業の成立の為にルーブリックをつくる

教員が授業力を向上させる為には、どの様な手順で、自己研修を行えばよいか。(FDのルーブリック)